

EC サイトなどによって、商品を直接消費者に販売すること。

菅付雅信著

『不易と流行のあいだ——ファッションが示す時代精神の読み方』

平凡社、2022 年刊
248 頁、1,600 円+税

国際ファッション専門職大学
高橋幸治

本書は株式会社ゲーテンベルクオーケストラ代表取締役で編集者の菅付雅信が、株式会社 INFAS パブリケーションズが発行・運営するファッションの総合メディア『WWD JAPAN』（タブロイドサイズの週刊紙とウェブ版からなる）に、2020 年 5 月から翌年 6 月末までの 1 年 2 カ月にわたって連載した 26 本の記事に加筆修正を施してまとめたものである。著者はこれまで「composite」（報雅堂）、「Invitation」（ぴあ）、「LIBERTINES MAGAZINE」（太田出版）といった個人的かつ先鋭的なカルチャー誌／ライフスタイル誌の創刊編集長を務め、『はじめての編集』（2012 年、アルテスパブリッシング）、『物欲なき世界』（2015 年、平凡社）、『動物と機械から離れて——AI が変える世界と人間の未来』（2019 年、新潮社）などの著書を上梓、下北沢の書店「B&B」では毎年「編集スパルタ塾」を主宰し、2022 年 4 月からは東北芸術工科大学基盤教育研究センターの教授に着任している。その多岐にわたる活動を詳細に記述しているとそれだけで相当な字数を費やしてしまうため、プロフィールはこのあたりにしておくが、いわゆる黒子的、裏方的な編集者のイメージとはまったく異なる稀代のスーパーエディターと言えるだろう。

「編集」の定義は人によってまちまちであり、出版社や編集部によってもその職務の内

容に相当のばらつきがあったりするが、基本的に編集者とは時代の目利きである。優れた編集者は目には見えない時代の空気を敏感に察知し、そこに感応している人々を集め、今まさに顕在しつつある事象をテーマとして選択し、最適な方法と手段によって公衆にメッセージを投げかける（= publishing）。ヒットを飛ばす編集者、あるいは、話題作を手がける編集者は、本人が自覚しているか否かにかかわらず、ほぼ間違いなく独自の嗅覚で時代の潮流を確実に感得している。

しかし、編集者はアーティストでもクリエイターでもないから、基本的に自分で作品を創造したりはしない。では、自著を何冊も執筆している菅付はどうなんだと問われるかもしれないが、前著『動物と機械から離れて——AI が変える世界と人間の未来』は、人工知能の開発・応用にかかわる研究者、IT 起業家、はては未来の人間像や世界像を論ずる思想家など、50 人以上の専門家たちへのインタビューを土台として成り立っている。菅付はそれらのトピックを整理し、関連づけ、対比させ、ともすると無軌道に散逸しがちな問題系からいくつかの重要な視点と観点を導き出す。つまり、同書は著者の主張を展開するための著述ではなく、論点を立体的に視覚化するために、極めて「編集的」に構成されている。今回ここで紹介する『不易と流行のあいだ——ファッションが示す時代精神の読み方』も同様に、ファッションを軸として書かれた多彩なテーマの記事群が有機的な連関を生み出し、ファッションという曖昧模糊とした流行や表現のかたちが時代の気分とどう交差しているのかを、ときには巨視的な視座でもって、ときには微視的な見地に立って、「編集的」に俯瞰した書籍であると言っている。

ここで、ひとまず目次を確認しておこう。「まえがき」と「あとがき」の間に 26 本の記事が連載時の掲載順にフラットに並んでおり、書籍化にあたって新たに語り起こした「対

談1 ファッションは果敢に変わりながら、大事なものを守る 村上要×菅付雅信」が13の記事のあと、「対談2 ファッションは、世界を自由に見せる概念だ 山縣良和×菅付雅信」が26の記事のあとに収録されている。

- 01 コロナの時代のファッション
- 02 コロナルックという一過性の楽しみ
- 03 デジタル時代のショーの価値
- 04 ウォンツはニーズを超える
- 05 羽根木～代田という三密なき流行地
- 06 カール・ラガーフェルドから学べること
- 07 「9月号」という幻想が終わった後に
- 08 『モード後の世界』を巡って
- 09 ノンバイナリーなカナリアたち
- 10 コロナ禍の中でファッション誌を作る知恵
- 11 ファッション・ピープルの居る場所
- 12 サステナブル・ファッションの間違い
- 13 政治がファッションになる時
- 14 ファッション写真は超越的ポルノグラフィである
- 15 性的誘惑を離れて香水を「着る」
- 16 タイムレスだからこそ、タイムリー
- 17 SNS時代の美女と野獣
- 18 セカンドハンドがファーストプレイスになるとき
- 19 K-POPはオリエンタリズムを超えるか
- 20 デジタルショーはファッションの民主化を推し進める
- 21 ファッションという総合芸術を教える
- 22 懐かしくも新鮮な日本製アメリカ
- 23 ウイグル問題に「政治的中立」はない
- 24 ポストコロナの商業施設
- 25 ファッションテックという希望
- 26 ファッションがタダになるとき

先程もう著者の紹介はこのへんでといったんは切り上げたのだが、菅付とファッションとのかかわりをごく簡単に述べておくと、「ま

えがき」の冒頭、「私はファッション・ピープルではない」(2ページ)と宣言しているながらも、東京コレクションには30年近く、パリコレクションにも10数回足を運んでおり、さらには、国内外のファッション雑誌を数千冊保有するコレクターでもある。もちろん彼が手がけた数々の雑誌でもファッションは重要な要素として存在していたから、まさに本人曰く「ファッションをずっと観察し続けているアウトサイダー」(2ページ)であり、この、内部のような外部のような、あるいは、内部でもないし外部でもないという中立的な往還者のまなざしが本書の通奏低音となっている。

したがって、ときにはファッションに対する並々ならぬ愛着がにじみ出ている文章があるかと思えば、外部の人間からしか発せられないような、批判的かつ挑発的な手厳しい論及も見受けられる(もちろん、それもファッションへの愛に裏打ちされたものであろう)。しかし、そうした著者独特の立ち位置が、ひょっとすると、読者によっては明快さを欠いたものに映るかもしれない。再三述べるように、本書はまさに新型コロナウイルスによるパンデミックが世界を動揺させていた時期にはからずも露呈したファッションの本質論と問題点の活写であり、「編集的」にパッケージされた多様な視点と観点の集合体である。そのため、ここから首尾一貫した言説や論旨、さらには停滞と閉塞を乗り越えるための安易な解決策や打開策を期待しても無駄であろう。そもそもファッションの世界とは「高い芸術性とあざといまでの商業性、貴族的排他性と貪欲に裾野を広げようとする大衆性が同居する、実に矛盾に満ち満ちた世界」(2ページ)なのだから、そこに包含されている課題に対しても複眼的な視線をもたなければ総体を眺望することはできない。

収録されている記事の数が多いためすべてに言及しているわけにはいかないの、ここでは、内部のような外部のような、内部でも

ないし外部でもないという、著者独自の立脚点が存分に生かされていると思われる記事を数本を取り上げることにしよう。

「21 ファッションという総合芸術を教える」では、「writtenafterwards」のデザイナーである山縣良和が2008年に設立したファッション教育のための新たな試みである「こののがっこう」を紹介しながら、今後のファッション業界を担う人材に必要な素養と資質が検討されている。山縣はジョン・ガリアーノやアレクサンダー・マックイーンといった人材を輩出したロンドンのセントラル・セント・マーティンズ美術大学の出身で、同校のウィメンズウェア学科を首席で卒業した最注目クリエイターの1人である。そんな彼がただでさえ多忙な本職のかたわら、わざわざ「こののがっこう」を開設したのは、まさに日本のファッション教育のあり方に疑問を抱き続けてきたからにはほかならない。

山縣は「ファッションにおけるリベラルアーツ的な発想が日本のファッション業界にはない。それが『こののがっこう』を始めたきっかけです。日本のファッション関係者がほかの領域のクリエイターと話す際、共通言語を持っていないと常々感じていました。しかし、ヨーロッパのファッション教育を見ると、共通言語、つまりリベラルアーツを鍛える教育になっていることに気づいたんです」（159ページ）と語る。著者も「山縣が言うようにファッションだけでなく、日本のクリエイティブ教育全般でもリベラルアーツがおざなりにされていると、美大で教えてきた経験のある私は感じる。しかし、ファッションは今や総合芸術、ファッションデザイナーは、服だけでなく、広告からショーの企画、店の内装、社会貢献活動にまで関わる総合芸術だ。そこではリベラルアーツ＝教養の底力が問われてくる」（160ページ）と説いているが、これはまさに、本学＝国際ファッション専門職大学に課されたミッションと同一のものであろう。いかに、従来のファッション

業界の慣行・慣例から逸脱した思考と発想を誘発、涵養、育成していけるか。本書の最後に掲載されている「対談2 ファッションは、世界を自由に見せる概念だ 山縣良和×菅付雅信」の中には、そのヒントが埋め込まれているように思う。

「25 ファッションテックという希望」では、ファッションテック（FashionとTechnologyを組み合わせた造語）の重要性とその可能性を提示している。ここで引き合いに出されているのはバクテリアの培養によって生地を作る「バイオロジカル・テイラーメイド」や、AIを用いたデザインによって生地の廃棄ロスを最小限に食い止める「アルゴリズムック・クチュール」で国内外の数々の賞に輝いた川崎和也である。川崎は自らを「スペキュラティブ・ファッションデザイナー」と称しており、テクノロジーと手を携えながら新たなファッション産業の地平を切り拓こうと試行している。

そもそも「スペキュラティブ・デザイン」とは、ロンドンのRCA（Royal College of Art）の教員であったアンソニー・ダンとフィオナ・レイビーがその著書『スペキュラティブ・デザイン 問題解決から、問題提起へ。——未来を思索するためにデザインができること』の中で提唱した手法であり、同書ではそのタイトルにもある通り、いま、安直な解を探し求めるよりも、問い自体を新たに立て直し、思索の端緒を多様に開いていくことこそがデザインの役割なのではないかと説かれている。上述書の中から「スペキュラティブ・デザイン」を端的に定義している部分を引用しておこう。

デザインという楽観主義は、たいていの場合は必要なものなのだが、場合によっては状況をより悪化させる危険性も秘めている。第一にそれは、我々の直面する問題が見かけ以上に深刻であるという事実を否定することにつながる。第二に、

世界を形成している我々の頭のなかの考え方や見方ではなく、目の前の世界そのものに手を加えることに労力と資源をつぎ込みすぎてしまう。

しかし、すべてをあきらめるものは早い。デザインには別の可能性がある。デザインを、物事の可能性を“思索 [speculate]”するための手段として用いるのだ。これがスペキュラティブ・デザイン [speculative design] である。スペキュラティブ・デザインは、想像力は駆使して、「厄介な問題 [wicked problem]」に対する新しい見方を切り開く。従来とは違うあり方について話し合ったり議論したりする場を生み出し、人々が自由自在に想像を巡らせられるよう刺激する。スペキュラティブ・デザインは、人間と現実との関係性を全体的に定義し直すための仲介役となるのだ。[ダン&レイビー 2015: 27]

川崎は「ファッションブランドの組織のあり方も新しくしたいんです。よくブランドを『メゾン』とか『ハウス』と呼びますが、それは『家』のメタファーですよ？ そこではデザイナーが親の役割で、パタンナーなどは子どもという上下関係のヒエラルキーがあるわけです。でも僕はもう『ハウス』は違うのではないかと考えていて、さまざまなエンジニアやデザイナーがフラットに存在する『ラボ』的な構造をファッションに作れないかと思っているんですよ」(184-185 ページ)とも述べている。こうした最新技術と創造産業の接近と融合への的確な目配り、そして、それを語るにふさわしいアーティスト／クリエイターの人選は、まさに編集者ならではの仕事と言えるだろう。

「26 ファッションがタダになるとき」では、内部のような外部のような、内部でもないし外部でもない著者のスタンスが、もっとも生かされた斬新かつ奇抜なアイデアの提示

がなされている。菅付は京都大学人文科学研究所の藤原辰史准教授の「食べることは基本的人権の一部であるはず。それなら、誰もが無料で食べられる社会を構想すべきではないかと思うのです」という言葉を援用しつつ、国連の「経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約」にある「締約国は、十分な食料、衣類、住居を含む、彼自身と家族のための適切な生活水準、および生活条件の継続的な改善に対するすべての人の権利を認める。締約国は、この権利の実現を確実にするために適切な措置を講じること」という文言を示したうえで、「もし衣食住の保証が基本的人権の一部であるとするなら、誰もが無料で衣服をまとうことを保証する社会というのも、十分考察すべきテーマではないか」(188-189 ページ)と語る。ファッション業界に長らく身を置いている人ほど、あまりにも荒唐無稽な、あまりにも非現実的な言説に聞こえるかもしれない。しかし、世界レベルで経済格差が広がり貧困層の急速な拡大が問題視される中、食と住に関しては程度の差こそあれ多くの国々で公的な補助がまがりなりにも実施されている。それは人間らしく生きるということを考えるのであれば、「口に入れば何でもいい」「雨風さえ凌げればいい」といったものではあり得ないだろう。したがって、もし、衣服をまとう権利の保証が存在すれば、やはり、「着ていけば何でもいい」というわけにはいかないはずである。では、そこにはいったい何が付与されていけばよいのか。菅付の「生物として生きることと人間として生きること、そのような必要性和余剰性の交差するところにファッションはある。そしてこの交差点こそが人間にとってエッセンシャルであると捉え直すと、新たな存在意義と産業構造が見えてくるはずだ」(193 ページ)という言葉に、思索をスタートさせるための端緒があるように思われる。

ファッションは全体として捉えどころがないぶん、考察の糸口はあらゆるところに発見

できる。本書はその手がかりの発見に大いに役立ってくれるはずである。移ろいやすさをその本質に宿した流行という現象と、サステナビリティとの相矛盾する関係を考え直してみるのもいいだろう。衣服を通してジェンダーの問題を深く掘り下げるのもいいし、昨今の不穏な世界情勢からグローバルなサプライチェーンの危うさに思いを致すことも必要だろう。そもそも衣服によって表現されるといふ個性なるものについて、一度じっくり腰を据えて問うてみるのもいいかもしれない。繰り返しになるが、本書にはファッションを考察するための多様なトピックが「編集的」に散りばめられている。そして、そこから先の編集作業は読者である個人々に委ねられている。

<参考文献>

ダン、アンソニー&レイビー、フィオナ 2015『スペキュラティブ・デザイン 問題解決から、問題提起へ。——未来を思索するためにデザインができること』久保田晃弘監修、千葉敏生訳、BNN。

廣田緑著

『協働と共生のネットワーク——インドネシア現代美術の民族誌』

grambooks 出版、2022 年刊
496 頁、3600 円＋税

国際ファッション専門職大学
金谷美和

今年は、インドネシアのコレクティブアートが注目された年であった。ドイツのカッセルで行われた現代美術の国際展「ドクメンタ15」の芸術監督として招聘されたのが、インドネシアのコレクティブ（美術家集団）、ルアンルパだったからだ。

このような国際的なアートフェスティバルの芸術監督として指名されるとは、ルアンル

パが現代美術界において高く評価されているということの証左である。ルアンルパとはどのような美術家集団なのか。またルアンルパを生み出したインドネシアの現代美術とはどのようなものなのか。世界中の現代美術の愛好家が、この疑問をもち、彼らに関心をもったに違いない。その意味でも、本書は時宜を得たテーマを取り上げた本である。

著者によると、本書の目的は、1) 美術関係者からの豊富な一次資料を提示すること、2) 美術界で活躍するさまざまなプレイヤーたちの民族誌を詳細に描写すること、3) 現代美術とは何か、現代美術の社会的役割は何かを問うことの三つであるとされる（本書、28-29 ページ）。

本書は、インドネシア本国の美術史家たちからも、「穴だらけ」だと評されていたインドネシア美術史を、現地語の資料を駆使し、また著者の現地での長期間の滞在中に行ったインタビューと参与観察から得られたデータによって「穴埋め」を行い、通史としてまとめた労作である。496 頁というボリュームは書籍としてかなり厚みがあり、そこに投入されたであろう時間と労力に圧倒される。先史時代から現代にいたるインドネシア美術界についての歴史資料、中でも数多く挿入された一次資料のインドネシア語から日本語への翻訳は、この分野に関心をもつ研究者や美術愛好家にとって有益であろう。

この広範な内容をもつ本書の概要を、インドネシアの現代美術の誕生とインドネシアのコレクティブという二つのポイントに絞って紹介したうえで、文化人類学におけるアート研究の観点から気づいた点を述べたい。

本書は三部で構成されている。第一部では、インドネシア美術史を先史時代から独立後まで外観し、インドネシア現代美術が誕生する素地となった歴史的、文化的背景について論じている。第二部では、インドネシア現代美術「スニ・コンテンポレル」の誕生について、当時の政治的背景と関連付けて明らかにして